

Japanese In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: W 78th St. bet Amsterdam & Columbus Ave.)

の間は『地球の歩き方～ニューヨーク編』から切り取った地図をジューパンのポケットに常備し、まるで観光客のように逐一地図で現在地を確認しながら生活していた。

「地下鉄は危険！」なんて潜在意識もあって、はじめの頃はもっぱらバスで移動していたが、生活に慣れてくると地下鉄の便利さが身に染みてわかり、やがて真夜中だろうと午前3~4時だろうとお構いなしに平気で地下鉄を利用することとなるのだが、とにかくニューヨークの街に慣れるまでは大変だった。

特にビビりまくったのは、夜も更けて辺りが静まり返る午前0時過ぎくらいからだ。よく利用した路線のバス停はアパートから2ブロックほど離れたブロードウェイ沿いにあり、ウェイターのディナー勤務やジャズを聴きに行き帰りが遅くなった時などは、バス停を降りると猛ダッシュ&ノンストップでアパートまで突っ走ったものだ。

この時間帯になると、デリ(デリカッセン)が開いている程度で、ほとんどの店は閉店となり、ブロードウェイ以外には人がグッと少なくなるような住宅街にアパートがあったこともあって、深夜過ぎの帰宅は心底怖かった。特にビビったのは、アパートとアパートが並ぶその建物の間の数段下がった場所にそれぞれゴミ捨て場があるのだが、夜になると何処からともなくホームレスたちがそのゴミ箱を漁りにやって来るのだった。

決して人種差別ではないが、当時は黒人のホームレスがほとんどで、向こうも人の気配に驚くのか、暗闇から鋭い眼差しでギロツとにらみを利かせることも多々あり、それはそれはビビった。

おまけに日本のホームレスと違って、ガタイのいいこと！ 中にはPRIDEに参戦しても不思議じゃないくらいガタイを誇る人もいた為、必死の思いで彼らの前を走り抜ける以外になかった。

しかし、こんな思いも地下鉄と同じで、この街の生活に慣れてくると、彼らの存在がだんだんといとおしくもなり、目が合うと「ハイイ」なんて言葉を交わすまでになっていき、また、「あの人はいつもいる人だから大丈夫」なんて、ほとんど気にならなくなっていくのであった。

だが、最初の頃はとにかく必死。生死に関わる思いで、まずバスを降りる前に、万が一「ギヴ・ミー・マネー！」なんて目の前に立ちだされた最悪の事態を想定して、命と交換に渡してしまう為用にウェイターで稼いだチップのうち10ドルくらいをポケットに残し、残りのチップは全て靴下の中に忍ばせる。また、そんな時に限って「あのジョン・レノンも数ブロック先のダコタ・ハウスで射殺されたんだよね…」なんて事が頭をよぎる始末…。

バスを降りる前からアパートの鍵を右手に握り締め、靴底がアスファルトに付いた瞬間に猛ダッシュ！ そして、1ブロックを駆け抜け、2ブロック目に入り、自分のアパートが視界に入ったら、右手に握り締めていた鍵を利き手の左手に持ち替え、直ぐに鍵穴に突っ込めるように鍵の向きを確認！ 背後に人の気配がないかチェックして、ドアへと続く階段を2段飛びで駆け上がり、一瞬の遅れもないように鍵を鍵穴に突っ込んで、中に飛び込む！ この一連の動作を経て、ようやく安堵感を覚えるといった具合で、今思い出すと笑ってしまうが、その時は本当に真剣だった。

その後も4年間そのアパートにお世話になり、結局怖い目になんて一度も会わず、幸せなニューヨーク生活を送らせてもらったが、今では本当に懐かしい思い出だ。